

1. 診療の現状

2007年度は従来の排尿障害を中心とした泌尿器疾患中心の診療から腎不全領域への診療拡大を行った。

特に、8月より週1回の腎不全外来（予約制）を開設したことにより、保存期腎不全をCKDガイドラインに準じて、熊本市内の腎臓内科医との連携で透析導入までの橋渡しを行えるようになった。

さらに2008年1月より当院での腹膜透析（CAPD）導入を開始し、現在2名の腹膜透析患者の外来診療を行っている。

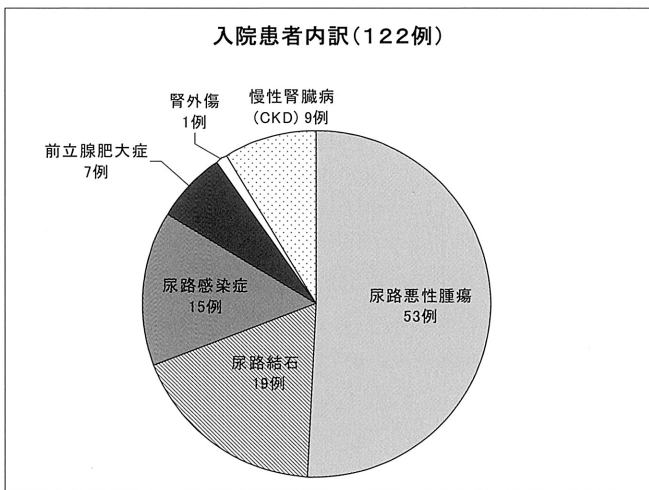
2. 診療実績

2007年度は、泌尿器科一人体制であることから診療形態を、入院中心型の診療から外来中心型の診療へ転換をはかった。

宇城地区は熊本県の中でも高齢者の比率が高く三割を超えており、泌尿器科疾患も多いことから開業医よりの外来紹介数は増加の一方をたどっている。

外来患者の主な内訳としては、前立腺肥大症や過活動膀胱などの排尿障害の紹介が依然として多く、その他、PSA高値といった前立腺癌の精査依頼や尿路感染症、尿路結石などの紹介が多かった。

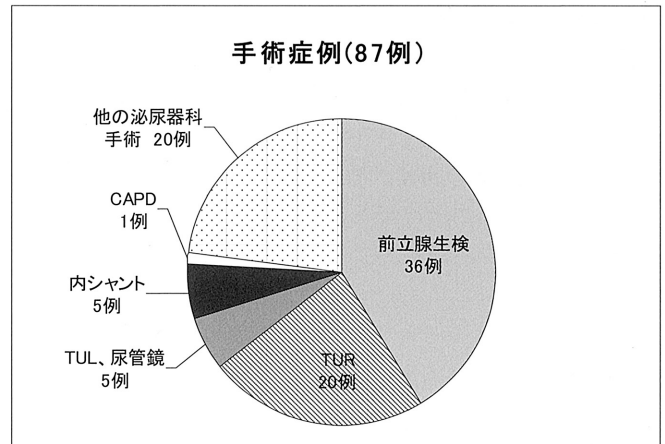
当科での年間入院患者総数は122名で、その主な内訳としては尿路悪性腫瘍が53例と全体の43%を占めて最も多く、尿路結石が19例（腎尿管結石18例、膀胱結石1例）、尿路感染症が15例（腎盂腎炎12例、膿腎症1例、前立腺炎2例）、前立腺肥大症が7例、腎外傷が1例、慢性腎臓病（CKD）が9例であった。



3. 検査・手術件数

2007年度は手術件数87件、検査件数85件であり、前年度より減少傾向が見られた。その要因としては治療対象として高齢者が多く、心血管系合併症が多く見られるため、抗凝固剤内服などのリスクファクターを多く抱えており、熊本市内のセンター病院への紹介数が増加したこと、近年前立腺肥大症などの排尿障害に対して効果の高い薬剤（αブロッカー）が開発されたことにより、TUR-Pなどの手術件数が減少したことがあげられる。

手術件数の内訳は前年度と同様、前立腺生検が最も多く36件と全体の41%を占めており、経尿道的手術は20件（TUR-Bt：14件、TUR-P：6件）であった。また、下部尿管結石に対する経尿道的尿管碎石術（TUL）は4件であり、今後の症例数の増加に期待したい。



4. スタッフ教育

4月より月1回の泌尿器エコーカンファレンスをスタートし、検査技師や放射線技師、看護師を交えて月1回、泌尿器疾患のテーマを決めスタッフ教育に取り組んだ。

また8月より、腹膜透析（CAPD）導入前の準備段階として、病棟看護師への勉強会を定期的で開催し、システムの確立をはかり、CAPD導入に向けての準備を行った。

5. 今後の展開

腎不全外来開設に伴うCKD患者数の増加に伴い、今後透析導入対象の患者数の増加が予想されるため、当院でのCAPD導入数の増加に力を入れたい。

また、泌尿器領域では4月より膀胱内圧測定器（シストメトリー）を設置したことで、神経因性膀胱や過活動膀胱などの排尿障害診断の質の向上を、熊本大学医学部附属病院との連携によりはかっていきたい。

依然として泌尿器科一人体制で出来ることは限られており、済生会熊本病院や熊本市内のセンター病院との連携は必要不可欠である。

今後は地域の患者さんが、遠隔地にいても熊本市内中心部と同レベルの医療を安心して受けられることを目指して、遠隔地での泌尿器診療を展開していきたい。